３．新聞等に掲載された活動

国際保健医療福祉学研究分野（原研国際）

氏名・職	活動題目	掲載紙誌等	掲載年月日	活動内容の概要と 社会との関連
高村　昇・教授	3月で被災から10年。これまでの調査や支援、伝承館の役割や意義について伝えた。	長崎新聞	2021年1月1日	3月で被災から10年。長崎大学の支援と現状、これまでの調査や支援、伝承館の役割や意義について伝えた。 東京電力福島第一原発事故の記憶や教訓を後世に伝えるために、２０２０年９月福島県が双葉町に「東日本大震災・原子力災害伝承館」を開設。旧ソ連のチェルノブイリ原発事故や福島第一原発事故で支援活動に携わり、長崎大原爆後障害医療研究所教授・福島県の放射線健康管理アドバイザーとして放射線の知識を伝えた。また、健康相談などを行ったことや、包括連携協定を結ぶ同県川内村・富岡町・大熊町を中心に復興支援に当たっていること、同県の意見・館長に要請されたことについて紹介された。
高村　昇・教授	福島医大が仮想空間で原子力災害訓練に取り組める教材用のソフトウェアを開発し、放射線医療で実績がある長崎大学が協力した。	福島民友	2021年1月1日	福島医大が、東日本大震災から丸10年を前に医療従事者らが対面せずに仮想空間で原子力災害訓練に取り組める教材用のソフトウェアを開発した。長崎大学は、放射線医療の実績があるため協力した。
高村　昇・教授	放射線を正しく理解するために、福島県富岡町にある富岡中富岡校で放射線教室を開いた。	福島民報	2021年1月3日	放射線を正しく理解するために、福島県富岡町にある富岡中富岡校で放射線教室を開き、長崎大学原爆後障害医療研究所の松永妃都美助教と折田真紀子助教が放射線の基礎知識や原発事故後の町内の放射線量の推移について紹介した。
高村　昇・教授	福島医大と長崎大の学生が原子力災害に取り組める教材用ソフトウェアを使い訓練を実施した。	福島民報	2021年1月22日	福島医大が医療従事者らが対面せずに仮想空間で原子力災害訓練に取り組める教材用のソフトウェアを開発した。福島医大と長崎大の学生がソフトウェアを使い訓練を実施、有事の対応に理解を深めた。
高村　昇・教授	同上	福島民友	2021年1月22日	同上

高村　昇・教授	西日本新聞が、「東日本大震災・原子力災害伝承館」について紹介をした。	西日本新聞	2021年2月14日	東日本大震災の発生から10年、福島県双葉町に昨秋開館した「東日本大震災・原子力災害伝承館」について、語り部による被災体験の活動と、新型コロナウイルス禍にありながら来館者数は当初の予測を上回ったことが紹介された。記事では伝承館の批判及び賛同についての意見があった。
高村　昇・教授	長崎大学で、復興学セミナーを開催し、地域再生で知見共有をした。	福島民報	2021年2月16日	長崎大学は、東京電力福島第一原発事故からの地域再生に向けた復興学セミナーをオンラインで開催した。遠藤雄幸川内村長、福島医大の山下俊一副学長とともに講演し、被災地の地域づくりについて知見を共有した。
高村　昇・教授	長崎大学で、復興学セミナーを開催し、地域再生で知見共有をした。	福島民友	2021年2月16日	長崎大学が、東京電力福島第一原発事故から3月で10年となるのを前にオンラインで「原子力災害復興学セミナー」を開催し、東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町）の館長として「放射線防護について世代や職業など（伝える）ターゲットに合わせたリスクコミュニケーションを進めることが重要だ」と伝えた。
高村　昇・教授	東日本大震災と福島第一原発事故から10年を前に、長崎大学が開催したオンラインセミナーで、講演を行った。	福島民友	2021年2月16日	東日本大震災と福島第一原発事故から10年を前に、14日長崎大学が開催したオンラインセミナーで講演を行い、被災自治体ごとに住民の帰還率に差が出ている現状を紹介し「10年が経過して復興のフェーズに差が出ている。それぞれのニーズや状況に合わせた支援が必要だ」と伝えた。
高村　昇・教授	震災10年を前に、長崎大学がオンラインセミナーを開催し復興の現状を報告した。	長崎新聞	2021年2月16日	震災10年を前に、長崎大学がオンラインセミナーを開催し復興の歩みや村の現状を報告した。遠藤雄幸川内村長、福島医大の山下俊一副学長とともに講演し、被災自治体ごとに住民の帰還率に差が出ている現状を紹介した。「10年が経過して復興のフェーズに差が出ている。それぞれのニーズや状況に合わせた支援が必要だ」と伝えた。

高村　昇・教授	大熊町から会津若松市に避難中の母親たちから放射線の不安等に関する相談を受けた。	長崎新聞	2021年3月9日	長崎大学と福島県会津若松市を結んだオンライン中継で、長崎大学原爆後障害医療研究所の松永助教とともに、大熊町から会津若松市に避難中の母親たちから放射線の不安等に関する相談を受けた。 同大は13年以降、同県内の３自治体（川内村、富岡町、大熊町）と包括連携協定を締結。被爆地での研究の知見を生かし、放射線量の測定や、避難先から戻った住民の健康相談に乗るなどの支援活動に取り組んできた。
高村　昇・教授	長崎大学が広報誌Choho特別号「福島と長崎大学これからの10年」を発行し、編集責任者を務めた。	長崎新聞	2021年3月12日	長崎大学の編集責任者として広報誌Choho特別号「福島と長崎大学これからの10年」を発行。東日本大震災発生から現在まで被災地への人材の投入など原爆後障害医療研究所を始め全学的に取り組んできた支援や現地の復興の軌跡を振り返るとともに今後の被災地の展望を紹介した。
高村　昇・教授	長崎新聞社が発行する情報誌NRに、長崎大学広報誌Choho特別号と東日本大震災・原子力災害伝承館での活動が紹介された。	長崎新聞NR	３・４号	長崎新聞社が発行する情報誌NRに、長崎大学広報誌Choho特別号と東日本大震災・原子力災害伝承館が紹介された。東日本大震災から10年が経過。長崎大学は、原爆後障害医療研究所が中心となって原発事故直後から福島へ人材を派遣し、福島県立医科大学の緊急被ばく医療再構築、福島県民へのリスクコミュニケーション、さらには福島県民健康調査立ち上げなどに尽力してきた。また、令和2年9月20日、福島県双葉町に「東日本大震災・原子力災害伝承館」が開設。伝承館は、地震や津波だけでなく、福島だけが経験した原子力災害の記録や復興の過程を収集・保存・研究し教訓とするための施設。館長に就任したことと、長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり福島未来創造支援研究センター長であることが紹介された。
高村　昇・教授	東日本大震災・原子力伝承館（双葉町）が、同館で研究成果発表会を開催。	福島民報	2021年3月30日	東日本大震災・原子力伝承館（双葉町）が、同館で研究成果発表会を開催。上級研究員3氏とともに取り組み内容を報告した。複合災害の記憶と記録を後世に残すために、これまで取り組んできた調査研究の現状を発表するとともに今後の展望を語った。

高村　昇・教授	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館がオープンし半年が経過。インタビューを受け、これまでの活動内容を紹介した。	福島民報	2021年4月13日	館長を務める東日本大震災・原子力災害伝承館がオープンし半年が経過。長崎で医師として原爆被爆者の診察をしたことを生かし高齢化する被爆者の健康のため健康講和を始めた。またチェルノブイリで医療支援を始め、被ばく線量の評価をした。１０年前の原発事故直後に福島県放射線健康リスク管理アドバイザーになり県内で講演をした。その後長崎大のサテライトオフィスを置き、川内村や富岡町で住民の健康管理や安全・安心の確保、復興支援をしている。伝承館の活動について紹介し、今年3月から複合災害への対応を調査研究する活動を本格化させホールボディカウンターを導入し、社員と家族の安全・安心を確保することで離職者の増加を食い止めた。その他多くの会社と住民が放射性物質の量を測り食品検査できる様にし、研究者が記録し検証できる様にした。
高村　昇・教授	同上	山形新聞	2021年4月17日	同上
高村　昇・教授	同上	京都新聞	2021年4月18日	同上
高村　昇・教授	同上	高知新聞	2021年4月22日	同上
高村　昇・教授	同上	茨城新聞	2021年4月25日	同上
高村　昇・教授	同上	埼玉新聞	2021年4月30日	同上
高村　昇・教授	同上	信濃毎日新聞	2021年4月30日	同上
高村　昇・教授	同上	熊本日日新聞	2021年4月31日	同上
高村　昇・教授	創価学会長崎平和委員会による「長崎平和学講座」で、「東日本大震災から10年～長崎から福島へ」と題し講演を行った。	長崎新聞	2021年4月19日	創価学会長崎平和委員会による「長崎平和学講座」で、長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として「東日本大震災から10年～長崎から福島へ」と題して講演を行った。東京電力福島第1原発事故直後から福島県放射線健康リスク管理アドバイザーに就任し専門家として自治体や住民に助言。「原爆から復興した長崎は福島にとって大きなサポーターになり得る。福島産の果物を買うだけでも大きなサポート」と支援を呼び掛けた。
高村　昇・教授	環境省主催対話フォーラムについて案内があり、パネルディスカッションの参加者として紹介された。	読売新聞	2021年5月7日	環境省が主催する「福島その先の環境へ。」対話フォーラムの案内があり、パネルディスカッションの出演者として小泉環境大臣らとともに紹介された。

高村　昇・教授	長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として「東日本大震災から10年～長崎から福島へ」と題して講演を行った。	長崎新聞	2021年5月8日	長崎市内で、長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として「東日本大震災から10年～長崎から福島へ」と題して講演を行った。その際、聴講者より「福島の復興に取り組んでいくのは、原爆の悲惨さを知る長崎の使命です」と力強く述べられたことがとても印象に残ったとし、さらに福島県産の果物を購入することが大きなサポートになるという話に、これからは安心して購入していきたいとの意見が紹介された。
高村　昇・教授	環境省が除染土を巡る初の「対話フォーラム」を開催。オンラインで参加した。	福島民友	2021年5月24日	福島県内の除染で出た土壌を最大３０年保管する中間貯蔵施設（大熊町、双葉町）を巡り、環境省が県外での最終処分に向けた初の「対話フォーラム」を開催。オンラインで参加し、小泉環境相らとともに除染で出た土壌の再生利用など最終処分量を減らす取り組みに理解を呼び掛けた。
高村　昇・教授	「被ばく医療総合研修センター」が、大学病院構内に開所し式に出席した。	朝日新聞	2021年6月25日	原子力災害に備えて専門人材を育てる長崎大学の「被ばく医療総合研修センター」が、大学病院構内に開所し、式に出席した。「被ばく医療総合研修センター」は、救命と除染・被爆線量評価のための設備を備え、九州の医療関係者らを迎えての研修を担う。
高村　昇・教授	長崎大学が「被ばく医療総合研修センター」を同大学病院内に開所。長崎大学病院や同大原爆後障害医療研究所の専門家として講師を務める。	長崎新聞	2021年6月25日	長崎大学が、全国的に不足している被ばく医療従事者の人材育成を目的とした「被ばく医療総合研修センター」を同大学病院内に開所した。長崎大学病院や同大原爆後障害医療研究所の専門家として講師を務め、学内スタッフのほか、本県、福岡、佐賀、鹿児島県内にある七つの原子力災害拠点病院の医師や看護師・放射線技師らが研修を受けることとなった。
高村　昇・教授	教授を務めている原爆後障害医療研究所(原研国際）の折田真紀子助教が、今年度長崎大学医学部が授与する「角尾学術賞」を受賞した。	読売新聞	2021年6月27日	教授を務めている原爆後障害医療研究所(原研国際）の折田真紀子助教が、今年度長崎大学医学部が授与する「角尾学術賞」を受賞した。受賞した研究は「東京電力福島第一原子力発電所事故後の福島県川内村・富岡町における住民の被ばくリスク認知評価」。折田助教は、放射線看護学の専門家として同原発の30キロ圏内にある川内村に派遣され、住民の健康不安の解消や相談活動などを行ってきた。16年以降は、同村に隣接する富岡町や大熊町にも同大の復興推進拠点が設けられ、スタッフの一人として長崎と福島県を行き来しながら支援を続けている。

高村　昇・教授	福島県内の中間貯蔵施設に運び込まれている除去土壌などについて、小泉環境省や他の有識者らとともに対話フォーラムで意見を伝えた。	読売新聞	2021年7月14日	福島県内の中間貯蔵施設に運び込まれている除去土壌などについて、小泉環境省や他の有識者らとともに対話フォーラムに参加し、「除去土壌の再生利用では、安全性の確保を大前提に、適切な管理の下で利用していくことが大事」等伝えた。オンラインで約1000人が参加。
高村　昇・教授	東京電力福島第一原発事故後、福島入りし県の放射線アドバイザーとして活動した10年について紹介された。	愛媛新聞	2021年7月30日	東京電力福島第一原発事故後、福島入りし県の放射線アドバイザーとして活動した10年について紹介された。福島県川内村の遠藤村長から「長崎大がなければ今の川内村はない」との意見を受け、今後の展望について伝えた。
高村　昇・教授	菅首相の退任に際し、東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として取材を受けた。	読売新聞	2021年9月4日	菅首相の退任に際し、東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として取材を受けた。昨年９月に首相が東日本大震災・原子力災害伝承館を視察し県民健康調査の展示に関心を示されたことを紹介し、今後も福島に関心を寄せてほしいと意見を述べた。
高村　昇・教授	環境省主催の対話フォーラムに、専門家として参加することが紹介された。	読売新聞	2021年9月5日	環境省が主催する「福島、その先の環境へ。」対話フォーラムに、第1回目に引き続き第２回目も小泉環境大臣らとともに専門家として対話セッションに参加することが紹介された。
高村　昇・教授	福島大環境放射能研究所の環境放射能学セミナーを開催。東日本大震災・原子力災害伝承館の館長・福島未来創造支援研究センター長として講演を行った。	福島民報	2021年9月5日	福島大環境放射能研究所の環境放射能学セミナーがオンラインで開催。東日本大震災・原子力災害伝承館の館長であり福島未来創造支援研究センター長として「原子力災害からの地域復興」と題し、川内村での復興支援活動を取り上げ講演した。村が長崎大と連携し、戸別訪問を通して住民の健康や安全を担保する事例などを紹介した。
高村　昇・教授	長崎大学は復興知夏季セミナーをオンラインで開催。川内村の川内ラボ交流室から講演を行った。	福島民報	2021年9月12日	長崎大学は復興知夏季セミナーをオンラインで開催。県内外の大学生が受講し、帰還困難区域周辺の線量やリスクコミュニケーションなどのテーマで講演とグループ討論が行われ、災害や被ばく医療科学を学んだ。川内村の川内ラボ交流室から講演を行い「被ばく医療やリスクコミュニケーションについて理解を深め、正しく知って正しく恐れることの重要性を知ってほしい」と語った。

高村　昇・教授	環境省が開催した二回目のオンライン対話集会に、長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として参加。	福島民報	2021年9月12日	環境省が開催した二回目のオンライン対話集会に長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として参加。対話集会のディスカッションでは、小泉環境相と共に東京電力福島第一原発事故に伴う除染廃棄物の県外最終処分に向け視聴者らからの質問・意見に答えた。
高村　昇・教授	環境省主催2回目の「対話フォーラム」で意見を伝えた。	福島民友	2021年9月12日	環境省は除去土壌処分の議論を深めるために県外での最終処分に向けた「対話フォーラム」の２回目をオンラインで開催。長崎大学教授・東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として意見を伝えた。
高村　昇・教授	環境省主催2回目の「対話フォーラム」で意見を伝えた。	河北新報	2021年9月13日	環境省は除染廃棄物の最終処分に向け、市民らが参加する第２回対話集会をオンラインで開催。小泉進次郎環境相や他の有識者らとともに意見を伝えた。
高村　昇・教授	長崎大学が災害・被ばく医療科学について学ぶオンラインセミナーを開催し、講師を務めた。	福島民友	2021年9月14日	長崎大学は、「復興知」を活用した福島イノベーション・コースト構想推進機構の人材育成事業の一環として、災害・被ばく医療科学について学ぶオンラインセミナーを３日間開催した。東日本大震災・原子力災害伝承館の館長であり長崎大の教授として講師を務め、富岡町の環境放射能や震災・原発事故の経験を伝承していく意義などについて伝えた。
高村　昇・教授	環境省主催2回目の「対話フォーラム」で意見を伝えた。	読売新聞	2021年9月26日	９月１１日に開催された環境省主催２回目の対話フォーラムで、「再生利用」が解く除去土壌の問題について小泉環境相や他の有識者らとともに意見を伝えた。
高村　昇・教授	長崎大学が、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興をテーマにオンラインセミナーを開催し、講師を務めた。	福島民報	2021年10月13日	長崎大学は、川内村のかわうちラボにおいて東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興をテーマにオンラインセミナーを開催した。長崎大学原爆後障害医療研究所の教授であり東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として講師を務め、「原発事故後、行政や住民、科学者が復興にどのように関わり、連携してきたかを知って欲しい」等と語った。

高村　昇・教授	長崎大学が、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興をテーマにオンラインセミナーを開催し、講師を務めた。	福島民友	2021年10月17日	長崎大学は、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興をテーマに、海外の研究者や学生らを対象としたオンラインセミナーを開催した。長崎大で被ばく医療などを学ぶベラルーシやカザフスタン、中国からの留学生が村を訪れセミナーに参加した。東日本大震災・原子力災害伝承館の館長であり同大の教授として講師を務め、「行政と住民、専門家が連携して復興をどう進めてきたのかを世界各国に広く知ってもらう機会となった」等と話した。
高村　昇・教授	東日本大震災・原子力災害伝承館が、震災風化防止イベント「あの日からの経験をふくしまの未来へ」を開催。俳優の辰巳拓郎さんと館長対談を行った。	福島民友	2021年11月7日	東日本大震災・原子力災害伝承館は、震災風化防止イベント「あの日からの経験をふくしまの未来へ」を開催した。伝承館の館長として、俳優の辰巳拓郎さんと「3.11の経験とこれからの地域づくり」をテーマに対談。原発事故とコロナ禍で置かれている世界の状況が似ているとし、「地震津波原発事故による複合災害の教訓は、感染症や気候変動の問題にも応用できる。」と話した。
高村　昇・教授	長崎大と川内村は、「復興子ども教室」を開催した。福島県川内村の小中学生11人が、長崎市の爆心地公園や長崎原爆資料館などを訪問し、原爆の実相や戦後復興の歴史を学んだ。	長崎新聞	2021年11月8日	長崎大と川内村は、被災地の復興を担う人材を育てるため「復興子ども教室」を開催。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の影響を受けた福島県川内村の小中学生11人が、長崎市の爆心地公園や長崎原爆資料館などを訪れ、原爆の実相や戦後復興の歴史を学んだ。
高村　昇・教授	東日本大震災・原子力災害伝承館が、震災風化防止イベント「あの日からの経験をふくしまの未来へ」を開催。館長として俳優の辰巳拓郎さんと対談した。	福島民報	2021年11月8日	東日本大震災・原子力災害伝承館は、震災風化防止イベント「あの日からの経験をふくしまの未来へ」を開催。伝承館の館長として俳優の辰巳拓郎さんと「3.11の経験とこれからの地域づくり」をテーマに対談し「複合災害の教訓は、感染症や気候変動などの問題にも応用できる」と伝えた。
高村　昇・教授	長崎大学が協力し「復興こども教室」が開催され、福島県川内村の子どもたちが被ばくリスクや地域復興を学んだ。	西日本新聞	2021年11月11日	長崎大学が協力して開催している「復興こども教室」の9回目として、福島県川内村の子どもたちが4～6日、県内を訪れ長崎市の平和公園や島原市の雲仙岳災害記念館を見学した。今年は村立川内小中学園6，7年の11人が参加し、被ばくリスクや地域復興を学んだ。

高村　昇・教授	福島の復興支援に主体的に取り組んできたことについて、原子力産業新聞のインタビューを受けた。	原子力産業新聞	2021年11月25日	長崎大学は福島県双葉町と包括連携協定を12月1日に締結する。これまでも、川内村、富岡町、大熊町と包括連携協定を締結し、各町村内に設置したサテライトオフィスを拠点として住民に寄り添った復興支援活動を行ってきた。福島の復興支援に主体的に取り組んできたことについて、原子力産業新聞のインタビューを受け、川内村、富岡町、大熊町での活動経験を振り返り、「地域ごとに復興のフェーズが全然違う。その違いを尊重しながら支援活動を行うことが重要」と伝えた。
高村　昇・教授	長崎大が福島県双葉町と包括連携協定を締結。伝承館館長で県放射線健康リスク管理アドバイザーとしてサテライトオフィスの活動内容などを説明した。	福島民報	2021年12月2日	長崎大は、福島県双葉町と町の復興と活性化に向けた包括連携協定を締結した。町内に復興推進拠点として、サテライトオフィスを設ける。締結式は、双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館で行われ、伝承館館長で県放射線健康リスク管理アドバイザーとしてサテライトオフィスの活動内容などを説明した。
高村　昇・教授	長崎大が福島県双葉町と包括連携協定を締結。長崎大・双葉町復興推進拠点で、同大原爆後障害医療研究所教授として活動する内容が紹介された。	福島民友	2021年12月2日	長崎大は、福島県双葉町と町の復興と活性化に向けた包括連携協定を結んだ。町民が安心して帰還・生活できるよう放射能に関する知識や情報の共有、健康影響への不安に応えるリスクコミュニケーション活動などに連携して取り組む。協定に基づき「長崎大・双葉町復興推進拠点」を設置。同大原爆後障害医療研究所教授として臨床心理士、保健師、薬剤師らとともに被ばく線量の評価や健康相談、講演活動を通じた住民の健康管理などを行うことが紹介された。

高村　昇・教授	長崎大は、福島県双葉町と包括連携協定を締結し、復興推進拠点を設置。原爆後障害医療研究所教授としての活動や東日本大震災・原子力災害伝承館の館長として取材を受けた。	長崎新聞	2021年12月2日	長崎大は、福島県双葉町と包括連携協定を締結した。放射線量の検査や健康管理などに取り組み、住民の帰還、町の復興を支援する。福島県内の自治体と同様の協定を結ぶのは川内村、富岡町、大熊町に次ぎ4例目。双葉町役場内に復興推進拠点（サテライトオフィス）を設置し、震災直後から福島県内で復興支援に携わる。長崎大学原爆後障害医療研究所教授として、臨床心理士、保健師らとともに町民の外部・内部線量を測定・評価し、健康相談や講演活動を通じて安全・安心を担保していることが紹介された。東日本大震災原子力災害伝承館の館長として取材を受け「震災から10年がたつが福島で双葉町だけ住民が誰一人戻れていない。帰還は困難が伴うが、川内村などで培ってきた知見、経験を生かし、町の復興に貢献したい」等と伝えた。

血液内科学研究分野（原研内科）

氏名・職	活動題目	掲載紙誌等	掲載年月日	活動内容の概要と社会との関連
宮﨑泰司・教授	からだの質問箱？	読売新聞（全国版）	2021年6月18日	読者からの質問「骨髄異形成症候群　治療法は」について、専門家として回答を行った。
宮﨑泰司・教授	原爆犠牲者慰霊祭挙行	長崎大学HP	2021年8月19日	8月9日（月）長崎大学医学部記念講堂において原爆死没教職員・学生の慰霊祭が今年はコロナ感染予防のため学内者中心で開催された。原爆放射線の影響から学び、放射線による被害を繰り返さないこと、安全な放射線利用を目指して研究を続けることは原爆後障害医療研究所及び長崎大学の進むべき道だという講話を行った。

腫瘍・診断病理学研究分野（原研病理）

氏名・職	活動題目	掲載紙誌等	掲載年月日	活動内容の概要と社会との関連
中島正洋・教授	長崎県「保険医療機関間連携病理診断」体制の構築	あじさいネットOFF LINE通信 Vol.37 8	2021年1月	長崎県「保険医療機関間連携病理診断」体制の構築について説明を行った。
中島正洋・教授	被爆者支援　日本の知見を	東京新聞	2021年9月24日	被爆者支援　日本の知見について説明を行った。
七條和子・助教	ヒロシマの空白　被爆の線引き ㊦　内部被曝を追う	中国新聞	2021年1月5日	ヒロシマの空白　被爆の線引き ㊦　内部被曝を追うについて説明を行った。

アイソトープ診断治療学研究分野（原研放射）

氏名・職	活動題目	掲載紙誌等	掲載年月日	活動内容の概要と 社会との関連
西　弘大・助教	新型コロナウイルスに関する研究	長崎新聞	2021年11月3日	コロナとインフルの同時感染についての研究が取りあげられた

資料調査室（原研情報）

氏名・職	活動題目	掲載紙誌等	掲載年月日	活動内容の概要と 社会との関連
三根眞理子・客員教授	原爆被災資料79点HP公開	長崎新聞	2021年2月2日	原爆被災資料を図書館医学分館に移管するにあたり、今後の活用を図るため資料目録を作成しHP公開を行った。